

自分の考えを持ち、自ら表現しようとする子どもを目指して ～新聞を活用した社会科の授業を通して～

指定校2年次 佐久市立岩村田小学校 岩田 典久

I 本校のNIEの現状

本校は、学校研究の重点（鋭研テーマ）に、「心と体をはたらかせながら学ぶ子ども—自らの考えを伝え、吟味し、再構築していける子どもを目指して— ～紡ぎ出されることば（観）から評価し学びを支える指導を：評価と指導の一体化～」を据え、各教科・領域での学習はもとより、学校行事など日々の学校生活のあらゆる場面で、「心と体をはたらかせる学び」を構想し、実践し、省察することで、学校教育目標「ひとりになれる ひとつになれる」の具現に努めている。

児童の新聞に対する実態をアンケートで把握してみると、多くの家庭で新聞を購読しているが、子どもたちが目を通す記事は、テレビ・ラジオ番組欄やマンガ、スポーツ欄が多く、ニュースや地域の話題は少ないことがわかった。日頃よく見たり使ったりするものとしては、テレビ、本、インターネットを挙げた子が多かった。また、教師のNIEにかかわる取り組みをみると、特に「NIE」を意識しての活動は行ってこなかったものの、何らかの形で、新聞を扱ったことのある教師は多く、新聞を活用するよさを実感しつつも問題点を指摘する声も聞かれる。



岩村田小学校 正門より

昨年度は、「社会的視野を広め、表現力を育む新聞活用のあり方」に重点をおき、新聞を活用した授業・活動として、日常的な活動（記事のスクラップ、朝の新聞スピーチなど）と各教科・領域での授業、両面から研究を行ってきた。子どもたちは、日常的な活動の継続により、社会に目を向けるようになってきた。また、それぞれ思いおもいに記事をスクラップしていたのを、一つのテーマを決め、テーマに関連した記事のスクラップに変えたことにより、「あっ、私もこの記事にしたよ。」「この記事にしようか迷ったんだ。」「やっぱりその人の選ぶと思った。」など、新聞が子どもたちのコミュニケーションの手段となり、話題が広がって会話が活発になる姿が多く見られるようになっていった。一方、教科・領域での授業では、学習を深めるための資料として新聞記事の活用を考え、実践したが、社会科では「新聞の使い方」「調べたことや自分の考えが表現できる単元展開」に、また道徳では「学習形態の工夫（グループによる意見交流、練り上げ）」に課題が残った。

そこで本年度は、テーマに基づいた新聞スクラップ作りを行い、新聞を活用した社会科の授業を通して、自分なりの考えを引き出せるような単元の構想や展開、授業一時間の構成を図り、思考・判断し表現する力を育てていきたいと考えた。そのことが、社会科学学習と実社会とをつなぐことに寄与すると考える。

「新聞という窓口を通して社会的事象についての自分なりの考えを持ち、自ら表現しようとする子ども」の姿を願って、研究がスタートした。

II NIE実践のねらい

高めたい力

- ①新聞をより身近なものに感じ、必要な情報を選ぶ力
- ②資料（新聞スクラップ、記事、広告）を基に、社会的事象を自分なりのことばで表現できる力
- ③調べたことや考えたことを発表し、考え合う力



願う子どもの姿

新聞という窓口を通して、社会的事象について自分なりの考えを持ち、自ら表現しようとする子ども

Ⅲ 研究の概要

1 実践した教科・領域

・社会 ・総合的な学習の時間



2 新聞の提供状況

(1) 11年度 購読計画表

新聞名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
朝日	○			○		○			○	
毎日				○	○				○	○
読売		○	○				○	○		
日経	○				○				○	○
産経			○			○	○	○		
信濃毎日		○	○				○	○		

※購読計画とは別に、学校として信濃毎日新聞を年間購読。

(2) 配置と整理、児童に触れさせるための工夫

- ①教職員が新聞に慣れ親しみ、活用へのヒントが得られることを目的に、職員室内の所定の場所（新聞名ごとのバスケット）に係が入れ、休み時間等に触れやすい、見比べやすいようにした。授業等で必要な場合は、そこから担任がクラスに持って行ったり、必要な部分をコピーして利用した。（教師に触れさせる→教材研究）
- ②4/27～11/30までの毎週水曜日、32回、1回当たり8部（班で1部）、信濃毎日新聞統合版を教材用新聞として購入し、実践に役立てた。（児童に触れさせる）

3 新聞を取り入れた実践をする上で工夫したこと

①新聞をより身近なものに感じ、必要な情報を選ぶ力をつけるために

- ・テーマを決め、テーマに沿った記事を新聞から探す作業を継続して行う。＜新聞スクラップ＞
- ・活動のエリアを各家庭（各家庭で購読している新聞から記事さがす）に広げ、「ファミリーフォーカス」の協力をお願いする。
- ・ノートや画用紙に貼り付けたりして、記事の内容を共有する。（グループで/全員で）

②資料（新聞スクラップ、記事、広告）を基に、社会的事象を自分なりのことばで表現できる力をつけるために

- ・新聞スクラップから得られる様々な事実や人々の思いや苦労などを読み取り、表現（記述）できるような場面を単元展開の中に位置づける。
- ・新聞広告のチラシやタイムリーな記事を使い、自分と記事とがつながるような場面を設定する。

③調べたことや考えたことを発表し、考え合う力をつけるために

- ・学習活動（授業）のねらいや目的に応じて、全体や小集団による話し合い、発表、ワークシートや付箋紙へ記入し、話題を共有する場を位置づける。
- ・学習問題に対して多面的に考えられるようにするために、互恵的なグループ学習を位置づける。

Ⅳ N I E 実践の内容

1 5年生の実践

＜事前公開授業＞

単元名 「食料生産と私たちの食生活」

単元の目標 我が国の農業や水産業について、地図や諸資料、新聞記事などを活用して調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりを持って営まれていることを自分のことばでまとめる。

本時の学習 主眼：東日本大震災は、日本の食料生産と食生活にどのような影響を与えているのかを考える場面で、「食料生産地被害マップ」を作り、自分の食生活と東日本大震災をつなぐセシウム汚染牛の新聞記事を取り上げ、問題の広がりに着目して友と意見交換することを通して、農業や水産業が盛んな地域は、国民の食生活を支えており、食料生産地の被害は国民の食生活への被害であることを自分の言葉でまとめることができる。

学習問題 東日本大震災は、日本の食料生産と食生活にどのような影響を与えているのか。

☆高めたい力①に関わって

成果☆テーマをもとに、自分なりに視野を広げながらスクラップしている子が多い。一つ一つの記事を丁寧に管理して、自分の考えを書いてあるノートもすばらしいと思った。

☆全員が大事なところにアンダーラインを引くなどができたスクラップ帳ができていてすごいかと感じた。

☆高めたい力②に関わって

成果☆情報の積み重ねによって、自分の意見を堂々と述べている子どもたちの姿があった。

☆子どもたちにとって新聞が考えるための大事な根拠になっていた。「被害者はだれ？」という教師の質問に「被害者は精肉店」というY児。「いや、育てた人でしょ。」というA児。どちらも自分の新聞を指さし、話している姿があった。

☆授業後半、班での話し合いの場面で、「被害者はだれ？」の意見をもとめられたとき、K児は「わら、もらった人、農家、店の人」とつぶやいていた。今までの新聞スクラップによって蓄積された情報だと思う。

課題★学習問題に幅がありすぎ、子どもたちにとっては難しい面があった。

★学習問題に対する子どもの意識が薄かったのではないかな。

★自分がスクラップしている記事を読み込んでいる子が多かったため、教師が求めていた「この新聞をもとに」という時も、今までためてきた知識から引き出している子が多く、意見がかみ合わなかったように見えた。

本時使いたかった新聞にもう少し注目させれば、活発な意見交換になったように思う。

成果：新聞スクラップを作るよさ

課題：自分と記事とがにつながるための支援・手立て

☆高めたい力③に関わって

成果☆話し合いながら、自分のスクラップや友だちのスクラップを交換して見ていた。

課題★NIE部会で追った子T・K児のグループから

課題：自分と記事とがにつながるための支援・手立て

子どもの姿

考察

教師：「班で新聞を出して意見交換して」

・なにもしゃべらない。

教師：「被害者はだれ？」

・教師がグループに来たとき、友だちが言った「生肉店」「漁師」との答えに頷きながら、ほかに何かある？という発問に対しては「ほかに～？」まったく思いつかないようだった。

教師：「食料生産地と自分の食生活とのつながりについて」

・だまって学習カードや新聞をめくっている。

教師：「新聞スクラップを振り返って米・野菜・水産業で共通することはないか？」

・べらべらノートをめくりながら「そうか、放射能か」とつぶやく。

教師：机間指導で「保育園はいいの？」

・R君が新聞記事を見て被害者だというと、大きくなすく。

教師：「まとめをして」

・なかなか書けない。横のAさんが書くのをじっと見ている。

・グループの児童も何も言わないので、何を言ったらいいかわからないのだと思う。

・自分がはった付箋も忘れてしまっている。先生の発問と自分が調べてきたことがうまくつながらない。

・だまって学習カードや新聞をめくっているのは、食料生産地と自分の食生活のつながりについての記事を探しているのだと思う。自分の生活を思い出しながら考えることができない。

・友の意見はよく聞いており、そのことについて意思表示をする。グループの中で話せる友がいると、自分の意見をもう少し膨らませることができるように感じる。

・自分の調べていた内容(米と野菜)と今日の学習問題を結びつけるものが花菜さんの中にまだ培われていない気がする。



2 全校研究授業

(1) 単元名 「自動車をつくる工業」

(2) 単元の目標

自動車をつくる工業を通して、我が国の工業生産について意欲的に調べ、自動車産業に従事している人々の工夫や努力や、工業生産を支える貿易や運輸などの働きを理解するとともに、国民生活を支える我が国の工業生産の発展について考える。

(3) 教材化

①単元に寄せた教材化

- a 自動車づくりに従事している人々の工夫や努力を自分なりの言葉で表現する単元を構想する

日 時 平成 23 年 12 月 6 日 (火) 第 5 校時
指 導 者 信州大学 教授 澁澤 文隆 先生
授 業 者 畑 邦弘 教諭
授業学級 5 年 1 組 男子 16 名、 女子 16 名 計 32 名



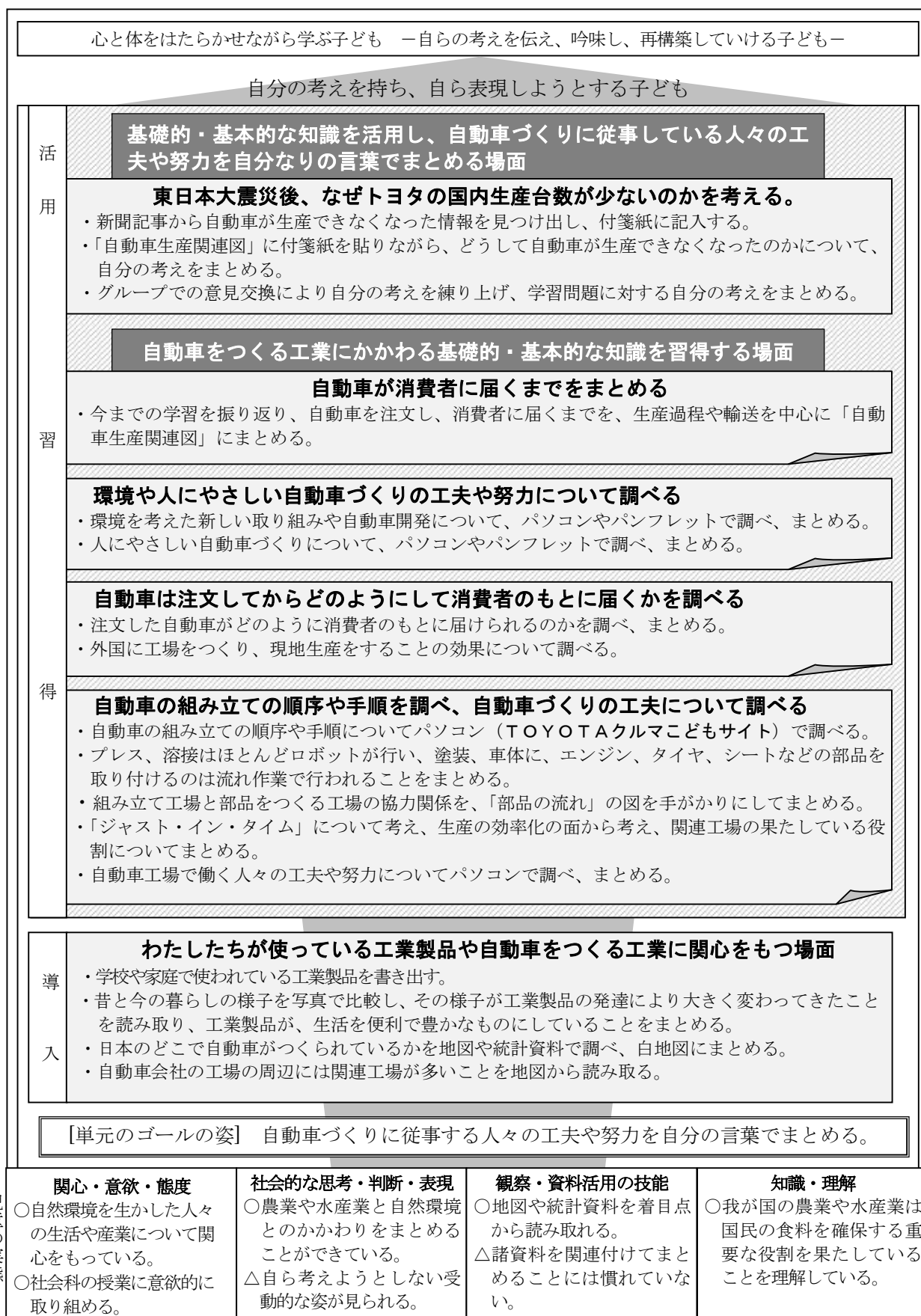


図1 自動車づくりに従事する人々の工夫や努力を自分の言葉で表現する単元の構想

本単元（図1）では、第1時～10時までを自動車をつくる工業にかかわる基礎的・基本的な知識を習得する場面として位置付ける。そこでは、表1のように、習得する基礎的・基本的な知識を決め出し、諸資料やトヨタ自動車のTOYOTAクルマこどもサイトを利用して学習を進めていく（本年度、東日

本大震災の影響もあり、自動車工場の見学は中止になってしまったため、自動車会社のホームページにある自動車生産のシミュレーションを利用することとする)。そして、習得の場面での最終には学んだことを振り返り、図2のような「自動車生産関連図」にまとめる。

続いて、習得した基礎的・基本的な知識

識を活用する第11～13時を位置付ける。そこでは、東日本大震災後、トヨタの国内生産台数が少なくなった社会的事象を追究していく。この場面では、新聞記事を読み取り、自動車が生産できなくなった情報を見つけ出ししていくようにし、その情報と「自動車生産関連図」とを重ね合わせて考えていく。

このような学習を通して、我が国の工業生産に従事している人々が、消費者の多様な需要にこたえ、環境に配慮しながら、優れた製品を生産するために様々な工夫や努力をしていることを自分の言葉でまとめていくだろう。また、社会科の授業で学ぶことと実社会とのつながりを見いだしていくであろう。

表1 習得する基礎的・基本的な知識

- ・自動車工場は全国に分布し、特に愛知県に多い。
- ・自動車は、たくさんの部品からできていて、自動車の組み立ては、広い工場の中で行われている。
- ・組み立て工場では、働く人々が様々な工夫や努力をして、効率よく正確に生産している。
- ・関連工場は、組み立て工場に必要な部品を、必要なときに必要な量だけつくって届けている。
- ・消費者に注文された自動車は、船やトラックで世界中に運ばれる。
- ・海外での現地生産も行われている。
- ・ハイブリッドカー、リサイクルしやすい自動車など、環境にやさしい車づくりを進めている。
- ・事故が起こりにくい自動車など、人にやさしく、社会や消費者のニーズに合わせた自動車づくりを進めている。



図2 自動車生産関連図 (例)

b 新聞スクラップを作ることのよさ

学習指導要領では、我が国の国土や産業に関する社会的事象を具体的にとらえたり、その意味について考えたりするために第5学年においては、表2のように各種の基礎的資料を活用することが考えられるとっている。諸資料を関連付けて考えることに慣れていない本学級の児童の実態を考えても、資料を活用する力を高める必要性を感じている。そこで、本学級では、東日本大震災での農業(米・野菜)、水産業(魚・貝)、畜産、工業への被害にかかわる新聞記事を貼りためていく活動を継続して位置付け

表2 学習指導要領にいわれる基礎的資料の活用

- ・資料から必要な情報を読み取る。
- ・資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。
- ・複数の資料を関連付けて読み取る。
- ・必要な資料を収集したり選択したりする。
- ・資料を整理したり再構成したりする。

てきた(図3)。そこでは、毎日新聞に目を通して児童を班長にし、一人一人の関心を基に、4人班を編成して、農業(米・野菜)、水産業(魚・貝)、畜産、工業の担当を決めて進めてきた。新聞記事をスクラップしていくに当たりまずは、教師が東日本大震災にかかわる記事の載っている新聞を用意し、自分の担当する分野の記事を見つかったり、他の分野の記事を見つかったりした。そして、各家庭で購読している新聞から記事を見つけていくようにこの活動を広げてきた。また、新聞記事にある情報・漢字の難しさを配慮し、家庭で新聞記事を共に読んでもらうように協力をお願いしてきた。このような活動を継続してくるにより(表3)のような力を高めることができると考えた。

表3 新聞スクラップを作るよさ

- ・新聞に書かれた情報を読み取る力。
(見出し、リード文を中心に)
- ・自分に必要な情報を選択する力。
(農業(米・野菜)、水産業(魚・貝)、工業)
- ・生活経験を基に、自分なりに思考し表現する力。



図3 S児の新聞スクラップ

②本時の教材化

a 新聞スクラップを基に、学習課題を設定する

第11時、習得の場面での学習を終え、自動車が消費者に届くまでを「自動車生産関連図」をまとめた児童に、「トヨタ国内生産台数」のグラフ(図4)を提示し、どのようなことが読み取れるか問う。児童は「2011年の3、4月にはトヨタの国内生産台数が減っている」や「5月から、少しずつ国内生産台数が増えてきた」、「でも、2011年の3月、4月、5月は国内生産台数が他の月と比べると少ない」と発言するであろう。そして、教師は、このような発言を全体に位置付けながら、学習問題「なぜ2011年3、4、5月はトヨタの国内生産台数は少ないのか」を設定する。その後、学習問題についての予想を考えるように促す。児童は「減った時期や生産が増えた時期を考えると、東日本大震災が起こったことが関係しているはずだ」、「東日本大震災で、自動車が売れなくなったのではないか」、「東北地方にもトヨタの工場があって被害を受けたから自動車がつくれなくなったからではないか」、「でも自動車の組み立ては愛知県が中心だった」「今までの学習から考えると、部品が届かなくなってしまって自動車をつくれなくなったからではないか」等の考えをワークシートに記入して、発表するだろう。そこで、教師は、どのようにしたら予想を確かめられそうか、児童を中心に問う。児童は「東日本大震災後に、工場が停止してしまった記事があったので、新聞記事を読み直して考えれば分かりそうだ」と答えるだろう。見通しがもてにくい場合には、工業を担当してきた児童に問うてみる。そして、教師は、工業担当の児童がスクラップしてきた新聞記事をグループで見返すように促す。児童は、「トヨタ・日産、全停止」「車も生産停止長期化」等の見出しを見つけ、予想が確かめられそうだと考えるだろう。そして、教師は、学習課題「東日本大震災後に、自動車が生産できなくなった情報を新聞記事から見つけて、意見交換しよう」を設定する。

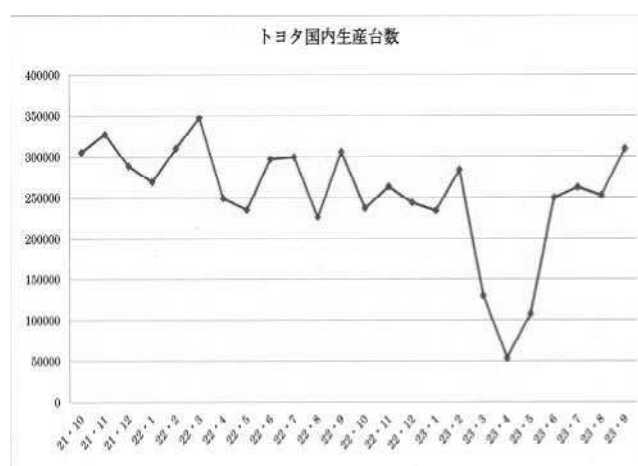


図4 トヨタの国内生産台数の推移

b 新聞記事から、自動車が生産できなくなった情報を見つけ、付箋紙に書き出す

学習課題を設定した後、教師は、工業を担当した児童の新聞スクラップの中から選び出しておいた新聞記事(図5)を配布し、追究するように指示する。そこでは、教師が新聞記事に解説を加えながら音読した後、児童に、自動車が生産できなくなったと考えられる情報を見つけ、付箋紙に書き出すように促す。児童は、新聞記事から、図6のような情報を付箋紙に書き出すであろう。その際、新聞記事の内容や漢字の読み方がわからない児童には、国語辞典で調べたり、教師が教えたりしていく。

このような学習で、児童は、東日本大震災後に、自動車が生産できなくなった情報を見つけ、付箋紙に書き出していくであろう。



図5 配布する新聞記事（例）

- ・東北地方にも関連工場があり、自動車の部品は3万点にもものぼる。
- ・東北地方の関連工場から、部品調達の支障がでるため。
- ・新日鉄の釜石製鉄所に被害が出てタイヤの骨格等に打撃を与えた。
- ・計画停電や輸送用の燃料不足で、部品を運べない。
- ・福島第1原発の影響で、周辺の会社に勤める社員に避難指示が出たため。

図6 新聞記事から見いだせる情報（例）

c 「自動車生産関連図」に付箋紙を貼り付けながら自分の考えをまとめた上で、互恵的なグループ学習を位置付ける

本時、教師は、前時の「トヨタ国内生産台数」のグラフを見せながら、学習問題「なぜ2011年3、4、5月はトヨタの国内生産台数は少ないのか」を全体で確認する。そして、前時、新聞記事から見つけ、付箋紙に書き出した、自動車が生産できなくなった情報を発表し、全体で共有する場面を位置付ける。その後、見つけ情報が自動車の生産にどのように関係するのかを確認するために、習得の場面でまとめた「自動車生産関連図」に、付箋紙を貼り付ける活動を位置付ける。児童は図7のように付箋紙を貼り付けながら、自動車の生産が止まってしまうことに納得し、自分の考えをワークシートに記入していくであろう（図8）。続いて、多面的に学習問題の答えをまとめられるようにするために、互恵的なグループ学習を位置付ける。なお、グループは、日常の授業の様子を配慮して中心となれる児童を含めた4人のグループを編成することとする。そこでは、付箋紙を貼り付けた「自動車生産関連図」を示しながら、東日本大震災後、自動車が生産できなくなった情報と確かめられたことを発表し合う。そして、全員の発表が終わった後に、グループで出し合った情報を整理し合う。児童は、出し合った情報を協力工場と部品にかかわる情報に整理していくだろう。その後、友の考えに対して、よいところ（青の付箋紙）、加えた方がよい情報（赤の付箋紙）を2つずつ書き、ワークシートに貼り付けて回していくようにし、友の書いたことに質問する時間をとるようにする（図8）。なお、付箋紙に具体的に記入できていない児童には、個別に助言していくようにする。

授業の終末で、教師は今までの学習を振り返り、学習問題に対する自分の考えをワークシートに記入するように促す。児童は、付箋紙を貼り付けた「自動車生産関連図」や友からの付箋紙を見返し、自分の考えをまとめて発表するであろう（図9）。

第13時には、2011年5、6月とトヨタの国内生産台数が回復していったことの背景にある、自動車づくりに従事する人々の努力を新聞記事から見つけて考えたり、タイの大洪水が自動車づくりに与えた影響を考えたりした後に、単元の学習の振り返り、ワークシートにまとめる場面を位置付け、本単元をまとめる。

このような活動で、児童は、社会科の学習と実社会とをつなぐことができ、我が国の工業生産に従事している人々が、消費者の多様な需要にこたえ、環境に配慮しながら、優れた製品を生産するために様々な工夫や努力をしていることを自分の言葉でまとめることができるであろう。



図7 付箋紙の貼られた自動車生産関連図（例）

自動車が生産できなくなったのは、東日本大震災で、東北地方にある関連工場が部品がつくれなくなってしまい、自動車を組み立てられなくなったからだ。

組み立て工場と関連工場の関係を
考えているのはよい。

トヨタは、ジャスト・イン・タイム
で部品の在庫は持たないこと。

部品が大震災で、運べなくなっ
たことも加えるといい。

図8 友から付箋紙の貼られたワークシート（例）

自動車には、関連工場で作る多くの部品が必要で、それらを組み立てられ自動車が生産されていることを学んだ。東北地方にも、トヨタの関連工場があり、東日本大震災で被害を受けてしまった。そのために、鉄の生産をはじめ、必要な部品を生産することができなくなり、トヨタは、在庫を持たない生産をしてきたから、部品が欠けてしまい、自動車の生産はできなくなってしまったのだ。だから、トヨタは3、4、5月の生産台数は少ないのだ。

図9 自分の考えをまとめたワークシート（例）

（4）授業の実際と考察

新聞記事から、自動車がつくれなくなった情報を見つけ出し、学習問題の答えを自分の言葉でまとめていったS児

日本の自動車づくりに従事している人々の工夫や努力を自分なりの言葉で表現する学習を構想した。教師は、第1～9時まで自動車をつくる工業にかかわる基礎的・基本的な知識を習得する場面位置付け、「TOYOTAクルマこどもサイト」でのシミュレーションや諸資料を基に、消費者のもとに自動車が届くまでの過程を学習するようにした。S児は、第10時、それまでの学習を振り返り、生産過程を言葉や矢印でつないだり、教師が用意した「TOYOTAクルマこどもサイト」にある画像を貼り付けたりしながら、自動車が消費者に届くまでを「自動車生産関連図」にまとめた（図10）。その後、教師は、自動車をつくる工業にかかわる基礎的・基本的な知識を活用する場面を位置付けた。ここでは、東日本大震災後、トヨタ自動車の国内生産台数が減ったという社会的事象を追究するようにした。第11時、教師は、トヨタ自動車の平成22年の国内生産台数や、一日の生産台数を全体で確認した上で、「トヨタの国内生産台数」のグラフ（図11）を提示した。児童は、「3月から4月は生産が減っている」「全体を見て、3、4、5月は生産が少ない」「6月から他の月と同じぐらいに戻った」ことなどを読み取った。そして、これらを基に、教師は、学習問題「なぜ2011年3、4、5月はトヨタの国内生産台数は少ないのか」を設定した。その後、児童に予想を考え、発表するように促した。児童は、「東日本大震災の影響にちがいない」「でも愛知県には津波は来ていないからそんなことはない」「東北地方にも、組み立て工場や協力工場があったのかもしれない」「部品がつくれなくなってしまい、自動車がつくれなくなったのではない」「東日本大震災で、自動車を買う人が減ったのではない」等の予想

（図12）を発表した。続いて教師は、予想を吟味しながら、組み立て工場や協力工場が東北地方にもあるのかと、部品

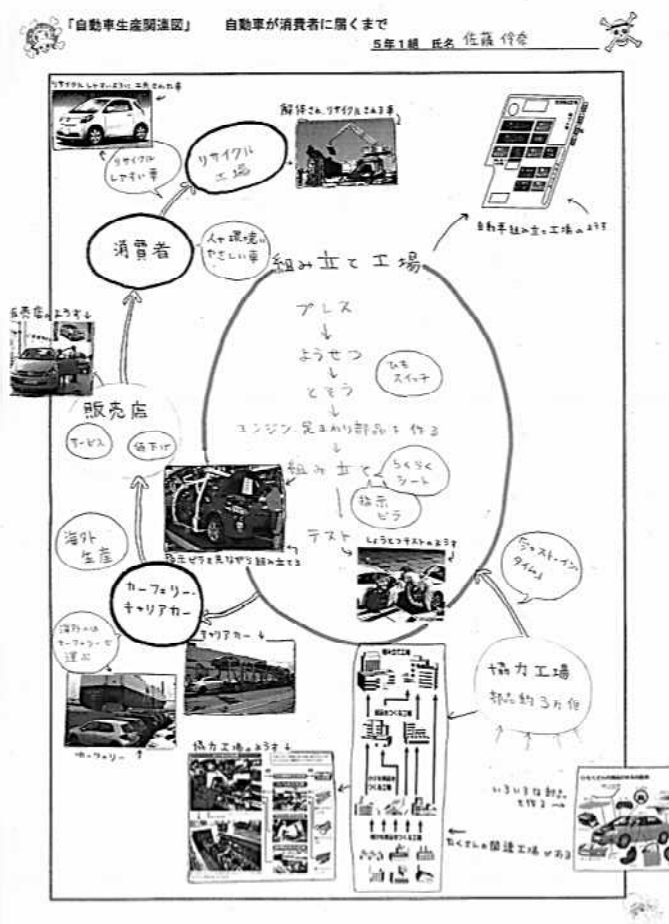


図10 S児の「自動車生産関連図」

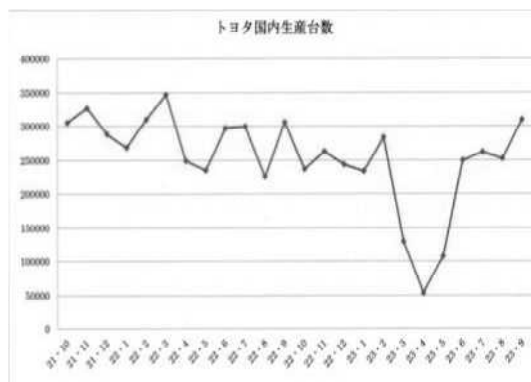


図11 トヨタの国内生産台数の推移

がつくれなくなったことに
 焦点化し、どのように追究し
 ていけばよいかを児童に問
 うた。児童の「今年起こった
 ことだから、教科書や資料集
 を見てもわからない」「新聞
 スクラップをしてきた中に、
 関連するような記事があっ
 た」との発言を全体に位置付
 けて、学習課題「東日本大震
 災後に、自動車が生産できな
 くなった情報を新聞記事から
 見つけて、意見交換しよう」
 を設定した。そして、工業を
 担当した児童の新聞スクラッ
 プの中スクラップの中から
 教師が選び出しておいた新
 聞記事(図13)を配布した。
 S児は自動車が生産できな
 くなったと考えられる情報
 を新聞記事から見つけ書
 き出していった。そして、それらの情報を付箋紙に書き出した(図14)。

第12時、教師は、新聞記事から見つけ、付箋紙に書き出した、自動車が生産できなくなった情報を全体で共有した上で、見つけ情報が自動車の生産にどのように関係するのか、「自動車生産関連図」に、付箋紙を貼り付け、自分の考えをワークシートに記入するように促した(図16)。続いて、教師は、互恵的なグループ学習を位置付けた。そこでは、付箋紙を貼り付けた「自動車生産関連図」を示しながら、東日本大震災後、自動車が生産できなくなった情報と確かめられたことを発表し合った。その後、友の考えに対して、よいところ、加えた方がよい情報についてワークシートを回しながら考え合っていた。友の考えに触れ、S児は自分の考えに自信を深め、授業の終末で、S児は、今までの学習を振り返り、学習問題に対する自分の考えをワークシートに記入した(図17)。

【考察】

第11時、S児は、自動車が生産される過程や自動車の生産に携わる人々の努力や工夫について振り返り、トヨタ自動車の生産の特色である「ジャスト・イン・タイム」や自動車には約3万個の部品が必要であり、それらは協力工場で作られて自動車が消費者に届くことをまとめた(図2「自動車生産関連図」)。第12時、学習問題に対して、東日本大震災がかわっていること、自動車の生産は、愛知県だけでなく、各地にある関連工場がかわっていることを予想した(図12ワークシート①)。

そして、協力工場と部品が作れなくなったのではないかに着目して、新聞記事(図13)を読み、東北地方にもトヨタの関連工場があることや、東日本大震災の余震や停電の結果、工場の機能が停止してしまったことを見出した(図14付箋紙)。

自動車がつくれなくなることを視点に、見いだした情報を「自動車生産関連図」に貼った(図15)。

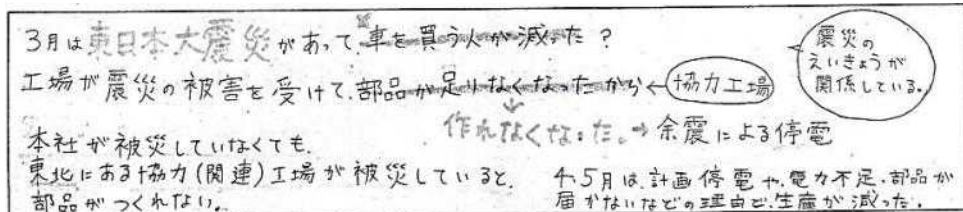


図12 S児の予想を記入したワークシート①



図13 教師の配布した新聞記事



図14 S児の新聞から読み取った情報



図15 付箋紙の貼られた自動車生産関連図

協力工場が被災してしまい、本社での生産に必要な部品が作れなくなりました。車には、その工場で作れない部品なども使うため、協力工場が被災すると、組み立て工場(本社)にも、えいまうが出る。トヨタは「分りはん法式」(在庫もなるべく持たないようにする。)を使用しているため、材料は、協力工場で作られた物を届けてもらうしかない。その他にも、余震による停電や、計画停電による電力不足のために、工場が停止してしまい、車が作れなくなる。津波のえいまうも出ている。また、製鉄工場の停止も関係していた。

なぜ 3.4.5月。国内生産台数がへったのか? (答)

主に、東日本大震災のせいだろうが大きい。まず工業の原点となる
製鉄工場が、停電などにより、停止してしまい、部品が作れなくなった。
トヨタは「かんぱん方式」で、材料が足りないため、材料が届かなくなると、
車が作れない。車作りというのは、どこか一つでも欠けると、全部ダメになってしまう。
(+動力が大切)

[illegible]

- ①新聞を活用して、どのような力をつけるのかを明確にした授業を構想したい。
- ②社会科だけでなく、その他の教科や領域への幅広い新聞活用のあり方を探っていきたい。
- ③低学年の新聞活用のあり方、新聞に親しませるための工夫や手立てについて研究していきたい。